

第11回

海外環境事情調査団報告

第11回 海外環境事情調査団 副団長 村河 善信

(三井造船(株) 環境・プラント事業本部 環境営業部 次長)

はじめに

平成16年10月13日～10月22日までの10日間に渡り、アテネ、ローマ2地域を視察し、南欧の廃棄物処理の状況について情報収集するとともに、環境ビジネス市場の動向につき調査を行った。

企画運営委員長のタクマの松村営業部長を団長に、工業会の木下専務理事を最高顧問として参加いただき総勢21名（内添乗員1名）の調査団となった。

日程については、実行委員会で検討の結果、全都清の日程と重複せず、ISWA（国際廃棄物協議会）のローマ大会に参加できることを考慮した。視察先は、当初スペインも候補に上がっていたが、スペイン国内でテロ事件（3月）もあり比較的安全であるアテネ五輪のギリシャとイタリアを選定した。詳しい調査内容は、現在、編集中の「調査団報告書」をご覧頂くとして、ここでは、概要について紹介する。

概要

10月13日11:25に成田発。パリでトランジットしアテネ空港着25:45。ホテルにチェックインしたのは、26:30。パリでの乗り継ぎ便が1時間遅れたことも影響し、なんと19時間の長旅となった。次の日は、時差調整でエーゲ海クルーズであったが、名実共に「船を漕ぐ」団員が相

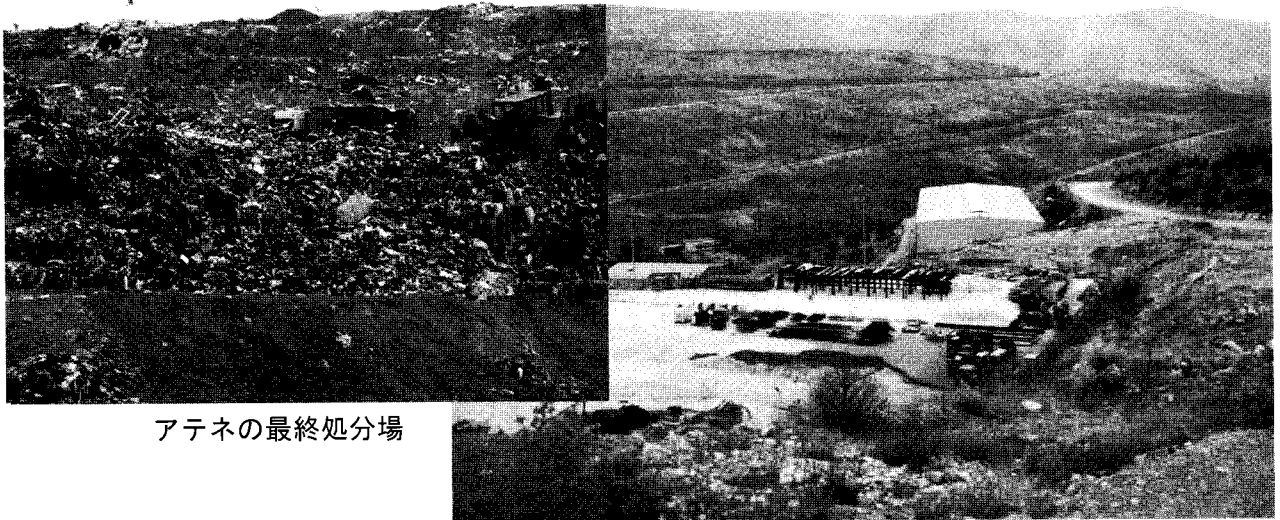
次いだ。前日の強行軍を考慮すればいた仕方なしと言うべきか。また、「青い空と海」エーゲ海を期待したが、曇天であった。夜は、アテネ五輪以来と言う雨天となった。

次の日は、初めての視察地A.C.M.A.R（Association of Communities And Municipalities In The Attica Region Solid Waste Management：アテネ市を中心としたアッティカ県全域の廃棄物処理会社）を往訪した。アテネ市内から高速で走ること約1時間、人家もなく荒涼とした盆地に東京都の中央防波堤の数倍もあろうかと思われる最終処分場に到着した。バイオガスプラントの視察と言うことであったが、基本的には日本で言う最終処分場に持ち込まれた廃棄物の一部を有効利用するための処理施設であった。

- ① 最終処分されたガスを回収し、発電する施設
- ② 持ち込まれた廃棄物を分別し、ビンや缶などを再利用するために分別する施設
- ③ さらに、有機物を発酵させコンポスト化する施設

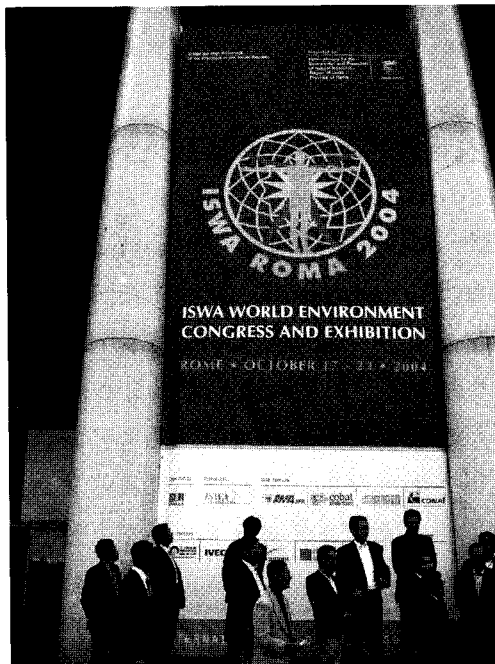
の3施設を視察した。

アテネでは、分別されず何でも棄てられており、ごみピットには、厨芥物のほかにパソコンやソファなどいわゆる「可燃粗大ゴミ」やビン、



アテネの最終処分場

アテネの最終処分場にあるバイオガス発電所



ローマ ISWA 総会会場入口

缶など「資源化ゴミ」が混在しており最終処分場で分別している状況であった。それも最終処分場に持ち込まれるゴミのごく一部にすぎず、これからも施設を増設して有効利用率を高めるとのことであった。

具体的な経済効果の数値が明らかになっていないが、何でも混在したゴミから有効物を分別しているアテネの「収集⇒分別」より日本の「分別⇒収集」の方が経済合理性に叶っていると再認識した。

4日目の10月16日（土）は、ローマへの移動の合間を縫って市内視察をした。前日とは打って変ってのアテネ日とでパルテノン神殿の階段を汗をかきながら登るほどであった。

古代の歴史がそのまま市内にあり近代的な五輪施設とよくマッチングしていた。しかし、五輪施設の維持管理費が年間1,000億円にもなりアテネ市の財政を圧迫しているとの報道が帰国後なされていたが、人口1,000万人のギリシャには過大な施設だったかもしれない。

10月17日（日）は、調査団はフィレツェとナポリの二班に別れ視察となった。小職は「ナポリ班」であり、約1時間南のナポリに向かった。「ポンペイ遺跡」は、今回の視察で何より印象的であった。約2000年前ベスビオス火山の噴火により火山灰に埋まった街で当時の生活そのまま約1800年間眠り続けた遺跡である。当時のローマ人の生活水準の高さにただ驚愕するばかりであった。日本はようやく弥生時代と言うのに、技術や物質の豊かさだけでなく社会制度までの現代的（むしろ進んでいたかもしれない）であったといえよう。



マラグロッタ処分場前にて調査団全員（後列右端に筆者）

10月18日（月）は、ISWA会議に参加した。人員制限の関係で工業会木下専務理事と神鋼環境ソリューションの赤澤氏に代表して出席いただいた。このお二人は、工業会を代表して2日後に、ローマ法皇謁見を許可されるという榮譽に浴した。

10月19日（火）は、第二の視察地エコイタリーマラグロッタ処分場を往訪した。ローマ市を中心としたゴミが、この処分場に最終処分さ

れる。アテネも同様であったが、カラスではなくカモメの群れが生息していた。サイトは海から20～30Kmは離れていると思うが何故かカモメであった。

エコイタリーマラグロッタ処分場も基本的にはアテネと同様で最終処分したゴミからメタンガスを抽出し、ガスエンジンにて発電を行っている。また、コンポスト化を行っており農地に還元するとのことであった。残念ながらデータの開示がなされなかったが、最終処分される前に有効利用の余地が多分にあると感じた。

午後は、ピサ大学のアイアコメツリ教授より燃料電池の将来のあるべき姿につき講演がありディスカッションを行った。



木下専務理事（左）と松村団長（中央）

視察の空き時間にローマ市内の遺跡・名所を視察した。コロッセオ、スペイン広場、トレビの泉等おなじみのコースであるが、「ローマの休日」を思い出す。これも偶然であるが、帰国一週間後に「ローマの休日」の再放送をしていた。



ローマ トレヴィの泉



ギリシャ 白い家の間からエーゲ海をのぞむ

オードリーの演ずる「アン王女」がローマ最後の日（この後アテネに旅立つのだが）に、記者会見に臨みグレゴリーペック演ずる新聞記者ジョー・ブラッドリーに別れを告げるシーンはあまりに有名だが、その記者会見で「アン王女」は、「私は、これから、EU 統一に向け、EU 世界で格闘していきます。」と所信表明をしていた。何度か「ローマの休日」を見たがこの言葉は、「映画上の言葉」としてしか理解していないせいか全く記憶になかった。今般、「ユーロ」により経済的には統一の方向に着々と進んでいる様子を肌を感じてきたが、映画製作当時の40年前にはここまで現実が進むとは製作者自身も想像だにしていなかったのではないだろうか。

ローマ最後の日は、松村団長主催のフェアウエルパーティーを中華料理レストランで行い、

調査旅行の成果や旅の思い出を語り合って散会した。翌日 20 日パリにトランジットし、22 日 14:30 成田に無事全員帰国した。

おわりに

小職は、松村団長より実行委員長を拝命し、今回の調査団の日程・調査先のお世話をさせていただいた。なにせ初めての経験であり不慣れなことの多いなか、工業会の田村室長のご指導や赤澤副実行委員長（海外駐在経験を生かした）のアイデア提供、横山副団長の的確なアドバイスがあり、大変スムーズに企画～実行ができた。また、何より、団員皆様のご協力により全員、大過なく無事に帰国でき、尚且つ有益な調査であったことを感謝し、紙面をお借りしてお礼申し上げます。